

自ら仏に帰依したてまつる。

まさに願わくは衆生とともに、

大道を体解して、

無上意を發さん。

自ら法に帰依したてまつる。

まさに願わくは衆生とともに、

深く經藏に入りて、

智慧海のごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。

まさに願わくは衆生とともに、

大衆を統理して、

一切無碍ならん。



教区内の各種団体の活動紹介

大阪教区内には、寺院・教会の枠を越え、志を同じくする僧侶や門徒が集まり、教化活動や教学、声明の研鑽をおこなう様々な団体が活動しています。

今回『しゃらりん』では各種団体の活動や願いについて、それぞれの団体の代表の方から紹介していただきました。なお、教区内で活動する全ての団体を把握しきれておりませんので、まずは難波別院の施設を使用して活動している団体を取り上げています。（五十音順）

大谷大学同窓会

大谷大学同窓会では、年1回、難波別院を会場として支部総会・講演会を開いています。

大阪府を大阪市、大阪北、大阪東、大阪南の4つの支部に分けていますが、支部総会は4支部合同での開催となっています。毎年9月の第1もしくは第2金曜日の夕方から、総会を、続いて講演会を開きますが、講演会には大谷大学の教授を招き、一般公開しています。講演会の後、先

生と役員とで懇親会を設け、講演をめぐって歓談をしています。

す。同時期に、全国で48講という大規模な催しでもあります。

大阪府下の同窓生は、現在5千人近くいますが、実際の参加者は30人程度という状況で、しかも活動としては、年1回のこの催しだけという頼りないものです。しかし、何とか大学と絆を持つてもらおうと、本部では会報の発行とともに、「ホームカミングデー」を設けて、学園祭中の大学で、恩師や学生との触れ合いの場を持つていただいております。



← 講師を囲んで

なお、難波別院の御堂筋沿いに、大谷大学の広報掲示板を設置していますので、ご注目ください。

これまで府下の同窓生全員に講演会の案内を出していましたが、今後会計上の制約もあり、困難な状況になっており、頭の痛いところです。一人でも多くの同窓生が集まり、絆を深めていければと思っています。

（第2組法山寺 藤原 憲）

大阪宗教者 九条ネットワーク

「大阪宗教者九条の会」は2005年1月27日、「憲法九条を守ろう」と宗教・宗派の違いを超え、カトリック大阪大司教会に集まり、発足しました。賛同者は数年で500人を越えました。これまで、府下には大谷派九条の会、念仏者九条の会、キリスト教九条の会などもうまれ、「憲法九条『改正』反対」を決議する教団もありました。

「憲法九条を守る」の一点で府下の宗教・宗派九条の会、教団にも呼びかけ、さらに運動を広げるため交流会を開きました。第一回交流会は2009年3月14日、南御堂で開きました。その後、何回か交流会を開くうちに、共同で2009年9月9日9時9分（99999）に九条の会の活動を府民に訴える取り組みを進めました。

当日は20カ寺で鐘がつかれ、4つの教会で祈りの集会が開かれました。また国際法律協会、フランス法律家協会がインターネットで「憲法九条を守ろう」という声明を発表、

世界に訴えてくれました。カナダでは、バンクーバー九条の会が寺院や教会に協力を訴え、雨の中、祈りのつどいを開きました。メイン会場の南御堂では、午前9時9分から鐘撞きをはじめました。イスラム教の6つの教団と府下の九条の会が11団体、計80人が参加しました。ブットンくんも特別出演で鐘をつき、盛り上げてくれました。

さらに運動を発展させるため、宗教・宗派九条の会、教団も参加してネットワークを発足させることになり、2010年2月27日、大阪宗教者九条の会結成5周年記念のつどい

を北御堂で開き、南御堂で「大阪宗教者九条ネットワーク」発足のつどいを開きました。参加者は98人でした。

毎年秋には九条を守るつどいを南御堂で開いています。参加したキリスト教徒、新興宗教の方、様々な方にお寺の雰囲気を感じてもらっています。

(第1組最勝寺 佐野彰義)

継続^{もんし}聞思の会

私たち「継続聞思の会」は、教学研修院修了者を対象に「共に聞法し、学習する継続した場」として、毎月1回の学習会を開催しています。

「聞法・学習・発表」を基本理念に取り組まれている教学研修院は現在9期(1期3年)に及んでいます。その第1期生の方々が3年間の学びを終えられた時に、これで終わるのではなく継続して共学する場をという願いのもと発足した「三研の会」が当会の始まりです。この願いは決して第1期生の方々だけのものではなく、根源的な願いでもあると思います。

ます。
教学研修院設立時に当時教化センター主幹であった本多恵先生が以下のように述べられています。

「教義の宣布と儀式の執行を、現に行っている我われにおいては、そのことに自信をもつて主体的に関わる意欲を喚起することが急務である。それにはまず、仏教に学ばねばならない。しかし、単なる教義、知的満足に止まるならば、それは真

宗学徒とは言いがたい。常に、人間同士の対話を通して、人間であることの悲しみを実感しつつ、それを原動力として教義に心の耳を傾けていく。その教学習する姿勢こそ、親鸞を宗祖聖人と仰ぎ、親鸞聖人と歩みを共にしようとする真宗門徒の生命であろう。この姿勢がおのずから他に響いていき、そこに共存する友が見出されていく。このことが、真の意味での教化である」

この願いに育まれ、押し出され、継続して学んでいく場が、私たち継続聞思の会です。

来春、大阪教区・難波別院宗祖親鸞聖人750回御遠忌が厳修されます。当会では、「共学」を基本テーマに、教化センター教化研究班との共催で『まんが宗祖親鸞聖人』(難波別院発行)をテキストにして、座談会を取り入れた学習会を、教区内寺院及びご門徒を対象に讃仰事業として開催したいと思います。是非ご参加ください。

(第8組受西寺 西受秀文)



→2009年9月9日9時9分、南御堂にて



→毎月の学習会

迎仏げいぶつの会

「迎仏の会」は、大阪教区教学研修院第6期修了者の有志が、月一度難波別院に集まり、聖典や諸先生方の著書を輪読し、座談をする会です。

初転法輪の地、鹿野苑近くの丘に「迎仏塔」と呼ばれている建物があります。そこは悟りを開いた釈尊が、かつて一緒に苦行を積んでいた5人の修行者に会いに行ったとき、彼らが釈尊を迎え

た場所であつたと伝えられています。初め彼らは、釈尊は苦行から落伍した者だから歓迎すべきではないと思つていたのですが、いざ釈尊に相對するとその姿、その言葉の威嚴に感銘し、最初の弟子になつたと伝わっています。まさに仏教が始まつたという処です。その「迎仏塔」にちなんで「迎仏の会」と名付けました。

学習会に参加していることで安心したい、仲間の顔が見たい、世間話がしたい、懇親会が楽しみ等々、参加する動機や想いは色々ですが、そのような私たちを「仏」はちゃんと追いかけてきて私たちの前にいてくれる。そんな気持ちで、聖教や先輩方の言葉に触れることを大切にしたいと輪読会をしています。

毎回の出席者は数人程ですが、時々参加する人や、久しぶりに顔を出してくれる人など、いろんな仲間がいます。気持ちの上では6期生みんな、そして有縁の方々と共に学んでいきたいという思いで続けています。

(第22組満泉寺 長谷俊成)

獅子吼ししくの会

私も「獅子吼の会」は10年前、当時30〜40代の僧侶有志で結成しました。真宗寺院を聞法の道場へと回復することを願い、法話を中心にする、研鑽を重ねてきました。

活動内容として、「聞法・学習・発表」を三本柱に、自ら聞法の場として「師を訪ねて」と題し、各方面で活躍されておられる諸師を招き、多くの方々と共に自らの聞法の場を開いております。

難波別院同朋会館の講堂にて、2011年宗祖親鸞

聖人750回御遠忌をお迎えするにあたり、「三夜連続 法話の会」を開催いたしました。あらためて自信教人信という言葉をいただきながら、宗祖のご生涯から現代の私たちの問題を見つめ直すために、各会員がそれぞれを受け持ち、お話しさせていただきました。多くのご門徒、住職、坊守、「寺族」の方々、のべ



←三夜連続 法話の会

300人の参加を得ることができました。2012年には我々に身近な、宗祖の顕された「正信偈・依経段」を講題に取り上げ、そこから照らし出される私たちの問題を各会員が発表させていただきました。引き続き2013年には「正信偈・依経段」を講題にした発表を予定しております。



→インド・迎仏の塔

同じ志を持つ若い方々にも加わっていただき、一層の幅広い「聞法・学習・発表」の場となることを願っています。今後も「師子吼の会」は、多くの方々と共に念仏のみ教えに出遇わせていただく機縁となる活動をしてまいりたいと思います。

(第22組蓮正寺 三好泰紹)

難度会

「難度会」は平成元年から『教行信証』を輪読している輪読聞法会です。

会ができるきっかけは、ある研修会の折、講師としてお越しいただいた大谷大学の延塚知道先生から「大

学時代は勉強をしても、卒業すると全く学ばなくなる者がいる。君たちも学びを怠ることなく深めていきなさい」と叱咤激励されたことでした。

何を学んでいこうかと発足当時のメンバーで相談した結果、親鸞聖人の主著である『教行信証』の輪読会をすることになりました。会の名前は「総序」の「難思の弘誓は難度海を度する大船」よりいただき、難度会とすることに決めました。

以来20数年、新しい会員も増え、現在「化身土巻」まで読み進め

てまいりました。その間、有縁の先生、諸先輩方に疑問点を問い、学びの視点の大切さを知らされました。

そのような中で、激動の文明開化の時代を生き抜かれた、清沢満之先生に求道の歩みを学ばせていただき、その視点を灯火とさせていただいております。

そこで、清沢先生のご遺徳を偲び、16年前より「臘扇忌法要」を勤めています。この法要では難波別院の後援のもと、清沢先生にゆかりのある方を記念講演の講師に招き、参詣の皆様と共に求道の歩みを聴聞させていただいております。

難度会は月に一度、当番が担当箇所を調べ発表するスタイルの輪読会です。発表者の意見を尊重し、議論をぶつけ合うスタイルの良さを今後にも活かし続けられるような息の長い会を目指しております。

(第21組淨得寺 松井 聡)



← 定例会での語り合い

八起会

我々「八起会」は、大阪教区教学研修院8期修了者の22名を主として構成しています。研修院修了時に、多くの修了者から「これからも教学の研鑽、普段の生活の中での悩み、各々の自坊での課題や取り組みの意見交換を行っていききたい。聞法、学習、発表を大事にしていきたい」という意見がでました。そこで、「聞法・学習・発表」の場をつくることにな

り、八起会がスタートしました。

会の発足から2年。これまで難波別院やメンバーの自坊を会所として、「かつての自分と今の自分」という題目で発表や座談をしたり、『和讃に学ぶ』（宮城顕著）の輪読及び攻究をしたりしています。月に一度集まり、年一度は講師を招き講座を行っています。

この2年間で、一番の課題となつて
いるのが「自己」です。普段の生活の中
でいき詰まる自己。いつのまにか聞
法・学習で偉くなったと思い込む自己。
どこまでいっても変わらないと思ひ込
む自己。それぞれがこの「自己」に直
面させられているように感じておりま
す。しかしながら、「自己」を隠し、飾つ
たりすることなく課題を共有できる仲
間、同朋がいることに同時に感謝して
います。

今後の取り組みとして、フィールド
ワーク（京都など）も計画中です。そ
して、「発表」の場づくりにも取り組
まなければならぬと考えています。

八起会では、新しく僧侶やご門徒
の皆様にも参加していただき、とも
に学びを深めていけたらと考えてい
ます。

（第14組専念寺 速水 泰）

微風みふうの会

私たちの会は約30年前に「子ども
連れでも気兼ねなくお話が聞きた
い」という願いのもとに発足した会
です。初めは「女ばかりの聞法会」
という女性だけの会でした。子ども
や赤ちゃん連れでも、月に一度先生
のお話に耳を傾け、それぞれが持つ
ている悩み等も話し、心が解放され

るひとときをすごしました。その後
「女性だけにこだわらなくてもよい
のでは？」と会の名前を「微風の会」
としました。

今まで『歎異抄』『御文』『本願文』
『正信偈』等を学んできました。現
在は、山陽教区光明寺住職・玉光順
正氏を講師に、今一度『歎異抄』に
学んでいます。

大切にしていることは、「時代背
景やその時の女性のあり方がどう
だったのか」「今、親鸞聖人
がいらしたら……」「現代の
社会問題に照らしあわせて
聞法していく」という思い
です。

そして、ハンセン病療養所
愛生園を訪れたことをきつ
かけに、年に一度一泊研修
会を行っています。例えば、
水俣で緒方正人さんのお話
を聞いたり、新宮市（和歌
山県）での高木顕明師の遠
松忌にお参りしたりしまし
た。流罪八百年の年には、
居多ヶ浜から竹之内草庵に
向かい、750回忌の時は、
関東二十四輩を巡りました。
昨年は、被災地の岩手県山



→水俣での研修

田町を訪ね、ミニ夏祭りを開催しま
した。そして今年は、東京での「さ
よなら原発10万人集会」に行き、デ
モにも参加しました。その他にも他
教区の坊守さんたちを訪問し、多く
の課題を語り合いました。その度、
たくさんのお会いがあり、その地の
方々と交流を持つことができました。
た。（いつもかなりの珍道中ですが）
これからもこの会を大切にし、聞
法していきたいと思ひます。この会
に興味を持たれた方は、ぜひ一度の
ぞいてみてください。今はもう孫が
いる年代になりますが、男性も若い
方も大歓迎です。

（第14組護念寺 本多敦子）

今回は難波別院の施設を使用して
活動している8つの団体を紹介いた
しました。教化・学習・研鑽等の
活動を行っている教区内の団体で
「しゃらりん」への掲載を希望され
る団体は、600文字程度原稿と
活動の様子がわかる写真2枚を大阪
教務所『しゃらりん』編集委員会担
当までお送りください。

「宗祖親鸞聖人講座」レポート

僧侶と門徒が共に親鸞聖人の生涯とその教えを学ぶという主旨で親鸞聖人学習講座（大阪教区教化委員会「研修・講座」部）が開催されています。

当講座では、親鸞聖人のご生涯とその教えを6回に分けて学ばれていきます。

第1回 幼少時代（1〜9歳）

10月24日

第2回 比叡山時代（9〜29歳）

11月21日

第3回 吉永時代（29〜35歳）

12月19日

第4回 越後時代（35〜42歳）

1月18日

第5回 関東時代（42〜60歳）

2月8日

第6回 晩年時代（60〜90歳）

3月8日

第1〜3回を廣瀬惺氏（同朋大学特任教授）が、第4〜6回を池田

勇諦氏（同朋大学名誉教授）が、それぞれ担当されます。

その第1回（10月23日）と第2回（11月21日）を受講しました。

第1回では、親鸞聖人の生涯を学ぶということが、単にそのことだけにとどまらない、それによって私たちの生き方を学び明らかにしていくことにつながるという、その学びの意義について述べられた。

聖人が、教化者としてではなく、生涯法然の弟子としてどのように本願に出遇い生きたのか、真実を探究し続けたその足跡が、私たちの生涯を通しての道しるべになっている、そんな方を宗祖にいただいているという、かけがえのなさを感じる。そんな宗祖に、自分の生き様に照らし出会っていくことがなければ、信不具足の、つまり信不十分な信心になつてしまう。

私のうえに、すでに道がある。しかし、その道は、意のごとくならな

い、苦悩に満ちたものである。その苦悩をどう克服していくか、その道を求めていくあり方を守っていく象徴が、寺・教団（僧伽）である。迷える衆生が仏縁をいただく出発点に立つ上で、その存在の意義は大きい。それはもちろん、私自身が生きるわが寺の現実こそが、私が学ぶ拠点であるということも、あらためて認識しなければならぬと思った。

その上で仏教を学ぶことにおいて大切なことは、有縁の知識たる、生涯導かれていかずにいられない人との出会いである。人であれ、知識であれ、自分の思いを超えるもっと大きなものに巡り合えるかどうかである。

第2回の講義では、聖人の比叡山時代を通して、その苦悩、悪人正機についての考察がされた。磯長の聖徳太子廟で得たと伝えられる、「自力の命があと10年余りで終わり、清浄土に入るであろう」との夢告を、

19歳の聖人はどのように受けとめたのだろうか。比叡山で学びながらも、どのような仏道を歩んでいくべきかという苦悶を抱き続け、それがつきつめられ結集したことばであったら

う。

その後29歳になって深い苦悩の中で比叡山を下りた聖人は、救いを求めて六角堂での100日間の参籠のすえ、崇敬する聖徳太子の語りかけともいふべき、救世観音の夢告を得る。凡夫のままに開かれた道こそ往生浄土の道であるとうなずけるその夢告に導かれ、念仏者として歩むべく法然上人のもとへ赴いたのである。

どこまでも求め続け、教えをいただく立場で生きた聖人は、指導者の歴史には不思議と残らなかった。しかし、聖人を宗祖と仰いでその教えを繰り返し繰り返しいただいていた人たちの、迷いや苦しみや出会いの喜びが道になり、それが私たちの上に連綿と続いてきていることに、あらためて感慨を新たにす。聖教を繰り返し繰り返し、聞法を心がけたうえで「時節到来」は、廣瀬氏が言われるとおり、珠玉のことばであろう。

次回以降も楽しみである。

（藤林）



帰敬式

大阪教区では、ここ5年で60ヶ寺において、住職が剃刀の儀を行い、725名の方が法名をいただき、仏弟子となられています。

今回、第7組の教應寺（建部智宏住職）において、帰敬式が執行されました。執行にあたり、教化委員会（専門部会「儀式・法要」部）が展開する「帰敬式執行に関する講習会」を受講され、帰敬式に臨まれました。各寺院・教会での帰敬式執行への参考となることを願い、取材を行いました。

帰敬式執行に関する講習会

まずは事前の講習会。これは名前のとおり受式される門徒さんの事前講習会ではなく、執行する側の儀式執行・作法の講習会です。いざ帰敬式を自ら執行しようと思いつても、「剃刀の儀の作法はどうだったっけ?」、「式では勤行があるのか?」などなど、もし私が帰敬式を執行するとすると、不安になります。そんなことを教えていただけるのが、この講習会です。



↑ 式のリハーサル

↑ 映像で確認

教化委員会「儀式・法要」部より
依頼され、教應寺へ出向された講
師は廣澤信彦さん（第7組願力寺住
職）。まずは帰敬式の作法や手順を
ビデオを見ながら確認した後、実際
に執行の練習に入ります。特に剃刀
の儀の作法は、係役の藤政朋宏さん
（第9組徳用寺）と共に、念入りに
練習されていました。

その後、式全体の流れを、講師か
らのアドバイスを受けながら、何度
かりハーサル。ほぼマンツーマンで
講師からご指導をいただくこのよう

な形式は、とても練習になるなど感
じました。

帰敬式

講習会の約3週間後、いよいよ本
番の帰敬式が執り行われました。当
日は教應寺さんの報恩講。帰敬式の
受式を呼びかけてこられました。希
望者が多く、2日間に分けて執行
することとなりました。

門徒さんたちはやはり少し堅い面

持ち。ご住職や進行役のみなさんも
やはり同じ。そんないい意味での緊
張感の中、式は厳粛に進行していき
ました。剃刀の儀、法名伝達式が無
事終わり、最後にご住職の、新たに
仏弟子となられた方々へのご法話が
あつて式は無事終了しました。その
後は記念のお齋をみなさん揃って
ただかれました。

受式者のみなさんに感想をお聞き
しましたが、「感動した」、「身が引
き締まった」との声が多く聞かれま
した。

☆☆

帰敬式をより多くの方々に受けて
いただこうと思えば、執行できる人
間がたくさんいなければならぬのは
あたりまえのことです。極端なこ
とを言えば、大阪教区の僧職にある
もの全員が、きちんと帰敬式を執行
できる知識を持つことが必要なの
ではないか。そんなことを感じました。

そのために、このような講習会
を活用し、ひとりでも多くの仏弟子
が誕生するように、一人の住職とし
て取り組んでいきたいと思いまし
た。

（澤田）



→ 剃刀の儀



→ 法名伝達式



↑ 受式されたみなさんとの記念撮影 ↑

大阪教区

御遠忌通信

「女性僧侶による法要」レポート

このたびの大阪教区・難波別院宗祖親鸞聖人750回御遠忌法要では、期間中、女性僧侶のみ出仕する法要が一座勤まります。女性僧侶が法要に出仕することによって、「寺族」女性の益々の意識高揚を図り、寺院・教区・宗門の発展興隆に寄与できればと願われて企画されました。2012年11月20日より毎月、難波別院を会場にお勤めのお稽古が行われています。今回、女性僧侶による法要に出仕する方々に、それぞれの思いと感想を寄稿いただきました。

私は友人に誘われて気軽に応募しましたが、練習初日、北広間に入ると、大変綺麗に間衣を着て居られる方がちらほら……。一瞬「もしかして私、場違いかも（汗）」と思いましたが、教えてくださる先生が優しい方で少しホッとしています。

『正信偈』真四句目下は、拙寺や出仕させて頂いたお寺での報恩講でお勤めしていますし、慣れているといえ慣れているのですが、男声に合わせないといけないので、音程を取るのに、正直、苦勞しています。ですが今回は女性ばかり、という

事です。それから、そういう苦勞はしなくて良さそうですね。

ところで……今更なんですが、最近、少し思うところがあり、『正信偈』を現代語訳したものを時間があれば読むようにしてるんです。漢文と違ってスツと入ってくるので、ダイレクトに心に響いてくるものがあります。

来々4月の本番では、その意味を噛みしめながらお勤めをし、先生が仰っていたように、回向が終わった後自然に手を合わせていただけるような「諸仏」になれるよう、練習に励みたいと思います。

南無阿弥陀仏
(第4組利福寺 山本亜矢子)

本山にて聖人の750回忌にあわせていただけ喜びが未だ醒めない折、私の住む大阪の地、南御堂で教区御遠忌が厳修されることを知り、「何か関わらせていただけたら」と思っておりまして。その矢先、女性僧侶による法要出仕募集の案内が届き、自分の実力も省みず、すぐに申し込みました。

日頃は男性僧侶の方々と唱和して

おり、音程が高いと言われ続け、自分の声を低くする努力をしております。しかし、1回目の講習のとき、北広間に清らかに高く響く女性ばかりの声明を耳にした感動に、声が止まり、聞き入ってる私がいるのです。先生より、「声明はお浄土の言葉、音楽、再現です」とご指導いただきましたが、なるほどと領けました。

これから何回かの練習に励み、当日多くの皆様と共に唱和して本堂にお浄土が再現できますよう精進してまいります。

来々4月25日が待ち遠しいです。
(第4組眞證寺 田路信子)

「女性であること」「得度とくどをしていること」その2点が合致しているということを出仕願いを出した私でした。

第1回習礼に参加して、この法要はとても稀有なことで知りました。明年4月25日の法要までに、私が僧侶としての意識を高め、また、お莊厳となりうるお声明を勤められるよう努力しなくてはならないと思いました。

ひとりではうまくお勤めにならない



→ 第一回の習礼の様子

いところ、お稽古する方々と共にではスムーズに声を出すことができませんでした。「法要の日、本堂にお集まりの門徒の方々が、自然と手を合わせ、お念仏を称えられるようなお勤めにしましょう」という先生のお言葉にそえるよう、これからの習礼に臨み

たいと思います。

(第7組因順寺 深澤和美)

習礼が始まるとまず、女性僧侶が集まり、森川徹先生のご指導の下に法要時の装束や式次第、それぞれが依用できる衣体について説明がありました。この習礼は法要までに7回あるようです。『正信偈』真四句目下げが始まりますと、女性らしい綺麗でやさしく、そして正しい声でそろってうたうたりしました。森川先生の丁寧な声で、はっきりと教わる中で、「これは大谷派の決まりです。これが大谷派の声明です。大谷派の声明は教学からきています」の言葉に身が引き締まります。

回向「我説彼尊功德事」では「司会者

が合掌と言わなくても」、先生はニコツと笑顔で「参詣者が、回向が来たら合掌するようなお勤めを」と言われたのが明らかでした。

これからたくさんの人たちのお世話になって法要が勤められることに感謝したいと思いました。

今回の法要を知って、東日本震災に遭われた方々、悩める衆生が生

きていく喜び、勇気と元気を持ってくだされば、なおうれしいのになと思いました。

習礼が終わってからは、各自お付き合いがあつて、おしゃべりに花が咲きました。ありがとうございました。合掌。

(第23組徳明寺 木全満知子)

「大阪教区・難波別院 宗祖親鸞聖人750回御遠忌法要」 晨朝(お朝事) 参拝へのご案内

2013年4月24日(水)から28日(日)にかけて、難波別院(南御堂)において、「大阪教区・難波別院 宗祖親鸞聖人750回御遠忌法要」が厳修されます。現在、教区御遠忌委員会並びに難波別院では、みなさまに各法座へ参詣いただけるよう準備を進めております。

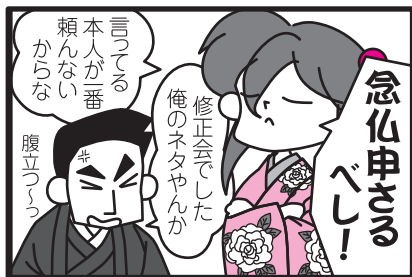
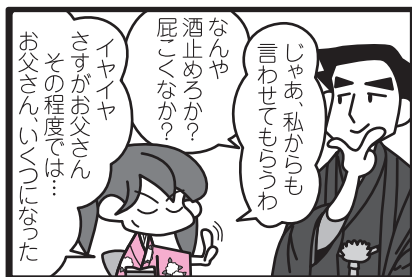
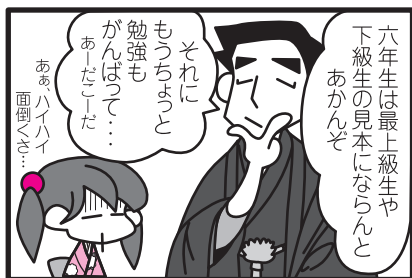
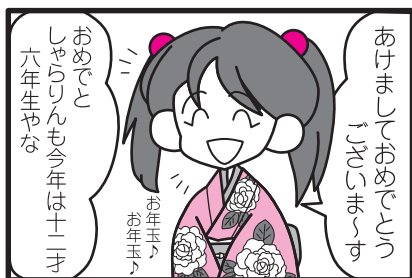
そこで、1日の始まりに晨朝(お朝事)に参詣しませんか。「おあさじ」、「おゆうじ」のお勤めは真宗門徒のたしなみとも言われており、一昔前には、どの門徒の家庭でも朝夕には「正信偈」をお勤めする声に響いておりました。

50年に1度の御遠忌を機会に『正信偈』(同朋奉讃式)と一緒に勤めし、真宗門徒としての生活を見直してみませんか。

なお、難波別院における平常の晨朝(お朝事)は午前7時からのお勤めですが、御遠忌法要中の25日(木)、26日(金)、27日(土)の3日間は午前8時からのお勤めとなります。(但し、28日は午前7時から)
また、境内では晨朝(お朝事)の後、あずき粥が振舞われます。
勤行本とお念珠をお持ちになってご参拝ください。

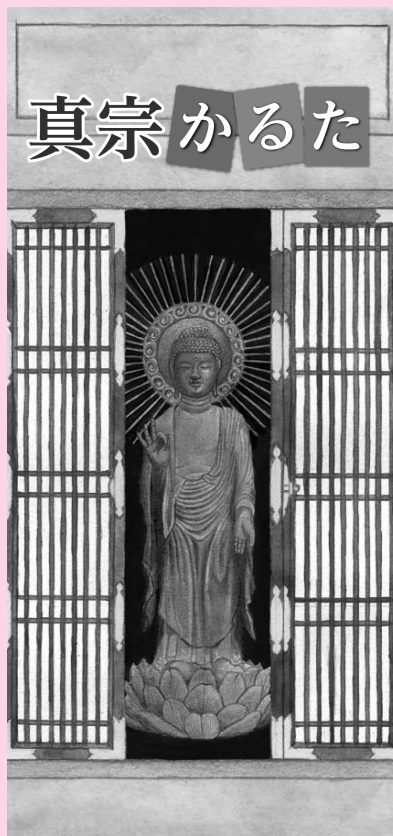
しゃらりんちゃん

新年のあいさつ 編



「道德はいくつになるぞ。道德、念仏もつるべし!」(蓮如上人御一代記聞書)

教区出版物のご案内



真宗大谷派大阪教区出版会議では、遊びを通して真宗の教えに触れるとともに、宗祖親鸞聖人のご生涯に親しんでいただきたいとの願いから『真宗かるた』を製作しました。大阪教区内の全寺院・教会には1セットお送りいたしております。ご家族で、あるいはお寺の子ども会等で使っていただければと思います。

『真宗かるた』へのみなさまのご意見、ご感想をお寄せください。

編集後記

今年平成二十五年に私は五十歳になります。昭和を二十五年、平成を二十五年と2つの時代をちょうど半分ずつ生きてきたかと思うと何か不思議な感慨を覚えます◆そのような話を子供にしたところ「五十歳かあ。信長やたら死んだるな。」と言われてしまいました。確かにかつては人生五十年などと言われていました。「自分も終わりに近づいているのかな、いやいや、うちのおばあちゃんは百歳まで生きたぞ。それを考えればまだまだ半分、これからや!」などと考えて自分を励ましたりもします◆しかし、今まで生きてきた年数を積み上げて喜んだり、残り何年くらいかなと数えて心が揺らぐことこそ自分の命を自分の物、手持ちの物としているということです。日々新たな命を「今をもらって生きている」と喜び、感動を持って生きていくことこそ念仏者の在り方なのでしょう◆論語には「四十にして迷わず、五十にして天命を知る」と孔子の言葉がありますが、天命どころか迷いの真ただ中にいる私です。(K)

発行日:2013年1月1日
発行所:真宗大谷派大阪教務所
大阪市中央区久太郎町4-1-11
TEL06-6251-4720

発行人:五辻信行

編集: 第4組 常榮寺・久世見証
第9組 淨圓寺・難波美千子
第10組 是三寺・北川浩三
第12組 清澤寺・澤田 見
第16組 即得寺・大戸俊彦
第17組 法親寺・廣瀬 俊
第25組 南林寺・藤林容子
第27組 願隨寺・平野圭吾
第27組 信證寺・吉内利彦

<http://www.icho.gr.jp/shararin/>